

題目 関係維持型知性の再検討

氏名 後藤すなを

指導教官 山岸俊男教授

本研究は、集団内で上手くやっていくための社会的知性である「関係維持型知性」と表情を読み取る能力との関連を明らかにするための探索的研究である。

集団内の対人関係を維持する上で、他者の感情表現に対して敏感であることや、相手の感情・態度を正確に理解することは重要であると考えられる。そこで、これまでの研究では明確に示されていなかった「関係維持型知性」と表情読み取り能力の関係を以下の指標を用いて調べた。

関係維持型知性の指標は「行動予測」と「関係性判断」である。具体的な「行動予測」の指標として、囚人のジレンマ（PD）において各集団内メンバーが、①不特定な相手に対してどう行動するのかという判断の正確さと、②予測者本人に対してどう行動するのかという判断の正確さを用いた。「関係性判断」については、③各集団内メンバーが自分に対して抱いている好悪をどれだけ把握しているかと、④集団内メンバーの二者関係についてお互いが抱いている好悪関係をどれだけ把握しているかを指標とした。また、表情読み取り能力は、人物の顔写真からその人物の表情や感情を把握しているかどうかを測定したものである。表情と感情はそれぞれ「嬉しい」と「悲しい」の2種類を設定した。

分析の結果、集団内の誰と誰の仲が良いかを把握している人は、人物が表出している表情を的確に読み取っていることが示された。なお、人物写真は集団内メンバーのものと見知らぬ他者のものを用いたが、表情や感情を読み取る正確さに違いは見られなかった。「行動予測」の正確さは表情読み取り能力とはほぼ無関係であった。

本実験で用いた写真人物の表情は、感情と一致した本当の表情と、感情と一致しない偽物の表情があるが、表情の本物と偽物を区別した程度と関係維持型知性の指標との関連は見られなかった。

本研究の結果、集団内メンバー同士の関係性判断の正確さが表出表情を読み取る能力と関わっていることが示された。この結果は、これまではっきりと確認されていなかった知見として意義があるといえる。